

名前：

「知る権利」について声高に叫ばれることの多くなつた現代において、インターネットなるメディアが登場し、その価値が大きく評価されている実情について、私は必ずしも好意的に評価することはできない。

古来より人類は本能的な好奇心と直接的実益の両面を満たすものとして情報の価値をみてきたように思う。特に戦時下において、敵国の動きと自軍への命令は国家の死活を分かつ事項であり、情報の高速で確実な伝達手段について、多くのアイディアが生み出された。筆者の知るところによれば、インターネットもその過程で作られた一つが、大衆一般に公開されて育つたものであるようだ。

さて、少なくとも日本国内においては二十世紀初頭の現代において取り立てて緊張した政治情勢にあるわけではなく、史上稀に見るような平和な世界を享受することができている。そうした中で、最早大衆にとって情報は娯楽のひとつに過ぎないよう見えてくるさ

ういがあることは感じる。そしてこのことがインターネットにおける情報リテラシーの悪化を放置したひとつの要因であろう。

近代以降報道といえば、主に大衆の手ではなく企業によって任われ、知を求める人々から対価を得ることでのクオリティを維持してきた。即ち情報の収集・編集・流布は一般の目からはブラックボックスの中にあつた。そこで、少なからず報道に携わる者の中には使命感や倫理があつたところがある。ところが、大衆の中からはいわゆる「市民」と呼ばれる、社会に対し深い見識を持つ者が現れると、正義感からブラックボックスの中にある影を暴くという動きが起こつた。ふたを開けてみると、先に述べた道徳は完璧に機能していた訳ではなく、政界財界との中着等から、利権をむさぼるべく情報を操縦している実態もあつたことが明らかにされた。しかしながら、市民にはそれを正し、真実を大衆に伝えるだけの力がなかつた。インターネットは、そんな

1800字

名前：

2/2

市民によつて開拓されたメディアであると言えよう。

インターネット、人が紙媒体や放送と比べて大きく異なるのは、その自由さである。特に重要なのが、原則匿名であるということと、読者と報道者の両者に、誰もが同時になれるということである。前者は、発信した情報についてその如何を何者にも問われないということ、後者は誰かが発信している情報が、実は出所が別の情報を勝手に改変して作られていり可能性があるということを意味する。これらについて、しっかりした知見を持つた人間なると対処できることであるが、今やインターネット上にいるのはそれができる市民だけではない。つまり、元々既存のメディア批判としての側面を持つたインターネットが、質の点で更にひどいものになっていりやもしれないということである。

諸々の問題を抱えていたとはいえ、企業による報道は、その責任の所在という点で明確

であることは間違いない。多少の乱れはあっても、そこまで無茶なことは出来ない。何故なら社会の目と対価の鎖があるからである。それらに背く行為をすることは許されな。つまり、根本的に報道が出来なくなるリスクを彼らは持つ。つまり、インターネットでは、個人に限ればこのようなパニッシュメントはほぼ不可能であると言、てより。

勿論、私はインターネットの可能性を全否定する気は毛頭ない。ユビキタスな情報浴への参加で、伝達の即効性という点で、インターネットはかつてないレベルでの社会変革を生む鍵を握っていることは間違いないから。

テクノロジーとして先進でありインターネットが、将来的に報道の中心になることは確実だと考え、利便性の点で私自身それを望む。一方で、責任と良心ある報道を維持させる仕組みが確立するまでは、既存のメディアと共存していくことが不可欠であると考えている。

1800字